

シルヴィア・プラスの作品における夢と影

田 中 美 和*

The Idea of Dream and Shadow in Sylvia Plath's Works

TANAKA Miwa*

Abstract

Sylvia Plath was a leading poet both in the United States and England. Though she is still famous as a poet, originally, she wanted to be a novelist, and actually she wrote some short pieces of fiction and a long piece. In this essay, I am going to focus on Sylvia Plath's idea of dream and shadow in her works; "Johnny Panic and the Bible of Dreams," *The Bell Jar*, and "The Bed Book," and "A Comparison." In "Johnny Panic and the Bible of Dreams," a mysterious lake which has dreams of all the people and a dream creator named Johnny Panic. In *The Bell Jar*, Esther Greenwood, the protagonist, thinks shadow as the most beautiful thing, and tries to take her shadow with her when she commits suicide. I infer that the idea of dream and shadow are connected in Sylvia Plath herself because their image has some common points. Moreover, Plath's picture book *The Bed Book* has relevance with the two works, for it is a children's poem about tremendous kinds of imaginary beds. Beds are, of course, the furniture for people to sleep on. People often have a dream while sleeping. I guess Sylvia Plath tried to lead children to the dream world by representing them a wonderful beds and take their fear for sleeping away through her poem because Plath, I believe, thought that dreaming is good for people. Also, the world of dream has something in common with her idea for poetry. In her essay on poem "A Comparison," Plath says that writing pome is like packing many kinds of things like "apparition of these faces in the crowd"(63) into suitcases. I believe that this reveals the connection between poetry, shadow and dream in herself.

キーワード：夢、眠り、影、詩

Keywords : dream, sleep, shadow, poetry

1. はじめに

夜、我々が寝ている間に見る夢については、太古より人々の謎であった。20世紀初めにジークムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1936) やカール・グスタフ・ユング (Carl Gustav Jung, 1875-1961) らによって、大きく解明されるように

なり、そのことは社会に大きな影響を与えた。20世紀のアメリカの詩人、シルヴィア・プラス (Sylvia Plath, 1932-1963) も、彼女の人生とその作品において、夢について自身の考えを投影してきたと思われる。本稿では、彼女の短編小説「ジョニー・パニックと夢の聖書」 ("Johnny Panic and the Bible of Dreams" 1958)、絵本『おやすみ、おやすみ』 (*The Bed Book*, 1976)、長編小説『自殺志願』 (*The Bell*

* 理工学部共通教育群非常勤講師 Part-time Lecturer, Division of Liberal Arts, Natural, Social and Health Sciences, School of Science and Engineering

Jar, 1963)、エッセイ「ある比較」(*A Comparison*, 1962)におけるそれと比較することにより、プラスが持つ夢の概念について考察していく。

2. 夢の創造主

本章では、まず初めに、シルヴィア・プラスの短編小説「ジョニー・パニックと夢の聖書」における、夢が意味するものを考察していく。主人公は、私立病院の精神科で患者の夢をタイプし記録する女性である。彼女は、彼らの見る夢に異常に興味を持っており、患者の夢の情報が記載されている記録簿を仕事の合間にこっそりと持ち出してきては読んでいる。彼女にとっては、「どんなクリスチャン・ネームよりも、夢の方が人々を見分けるのに適している」という。“[...] the dreams single them out more than any Christian name.” (157) この女性は、精神科に通う患者の夢を全て覚えてしまうほど、他人の夢に関心を持っているが、自分自身で見た夢の中でも最もお気に入りのものがあるという。それは湖の夢で、とても大きく、しかし決して美しいとは言えない濁った半透明の湖の夢である。その湖の底では、黒い影がうごめきうねっていたり、大昔から蓄積された人々の夢が沈んでいるために、その湖は臭いや臭気までも漂っている。

I've a dream of my own. My one dream. A dream of dreams. In this dream there's a great half-transparent lake stretching away in every direction, too big for me to see the shore of it [...]. At the bottom of the lake – so deep I can only guess at the dark masses moving and heaving – are the real dragons. [...] It's into this lake people's minds run at night, brooks and gutter trickles to one borderless common reservoir. [...] It's the sewage farm of the ages, transparence aside. Now the water in this lake naturally stinks and smokes from what dreams have been left sogging around in it over the centuries. (158)

それだけでなく、動物や胎児の遺体までが浮かん

でおり、またその他の捨てられたようなものでごった返している。この湖は、眠れる人々が悪夢の中で「大きな連帯」を形作るものだと主人公は言う。

By this time, I already see the surface of the lake swarming with snakes, dead bodies puffed as blowfish, human embryos bobbing around in laboratory bottles like so many unfinished messages from the great I Am. [...], it's here the sleeping people lie and toss together among the props of their worst dreams, one great brotherhood, though each of them, waking, thinks himself singular, utterly apart. (159)

ここから読み取れるのは、この主人公にとっての最高の夢とは、すべての人の夢の廃棄場のような場所であるということである。それは謂わば、ユングの発見した集合意識のようなものであるのかもしれない。あらゆる人々の深層意識の大元と、この女性の夢の湖は似ていると言える。この女性が欲しているのは、そこに廃棄された他人の夢である。それはおそらく、人々が経験したあらゆる物語を見、拾い集めたい新たな物語をつむぎ出したいと望む詩人、シルヴィア・プラス本人であると私は考える。また、Johnny Panic という謎の存在がいる。彼は人々の夢を創造し、また世界そのものを動かしているという。

Well, from where I sit, I figure the world is run by one thing and this one thing only. Panic with a dog-face, devil-face, hag-face, whore-face, panic in capital letters with no face at all – it's the same Johnny Panic, awake or asleep. (156)

彼女は彼の恋人であり、彼に会うために人々の夢の記録を読み漁り、それを「ジョニー・パニックの夢の聖書」と呼んでいる。そしてそれが彼女の本当の仕事“real calling”(157)であるという。人々が眠っている間に夢を見るのは、このジョニー・パニックの大きな仕事の一部をなすためであり、それ

を精神科医たちは阻止し、患者たちからジョニー・パニックを引っ張り出そうと試みているという。

To be a true member of Johnny Panic's congregation one must forget the dreamer and remember the dream: the dreamer is merely a flimsy vehicle for the great Dream Maker himself. This they will not do. Jonny Panic is gold in the bowels, and they try to root him out by spiritual stomach pumps. (165)

ある日、仕事の合間に夢の記録簿を盗み見るだけでは飽き足らず、主人公の女性は病院に泊まることを思いつく。職員全員が帰った後、主人公は一人病院に戻る。人目を逃れうまく病院に戻れたものの、夢中になって夢の記録簿を見ていると、患者の一人であるミス・ミララヴェイジと診療科長に見つかってしまう。そして二人は、主人公の女性をエレベータに乗せ、手術室と思われる電気のたくさんついた明るい部屋へと連れて行く。そして白いベッドに彼女を括り付け、彼女の中からジョニー・パニックを取り出そうとする。しかしその瞬間に、彼女はついにジョニー・パニックと対面することになるのである。そしてそこでこの物語は終わる。

The signal is given.

The machine betrays them.

At the moment when I think I am most lost the face of Johnny Panic appears in a nimbus of arc lights on the ceiling overheard. I am shaken like a leaf in the teeth of glory. His beard is lightning. Lightning is in his eye. His Word changes and illumines the universe. (172)

Sylvia Plath は、大学生の時に自殺未遂をし、その後精神科に入院し電気ショック療法を受けている。この最後の場面は、その時の様子を彷彿とさせる。それがジョニー・パニックを取り出すことと同じものだとすれば、ジョニー・パニックの正体が何者であるのか推測することはできる。そして人々の見る夢というものは、時に人々を狂わせる。しかし、

それが無い状態というものが果たして人間にとって良いものかということ、そうとは言えないだろう。夢の世界と分断されるということは、現実世界とは異なる影の部分とのつながりを断ち切られることと言えるだろう。プラスの他の作品に登場する夢や、それに匹敵するものを考慮すると、それは精神病を患う以上に危険なことだとプラスは言いたいのもかもしれない。さらに、芸術家にとっては、それは作品を作る源とも言えるもので、彼らは精神病を患う患者と同じ領域を共有していると言えるのではないだろうか。

3. 夢と影

本章では、シルヴィア・プラスの唯一の長編小説『自殺志願』(*The Bell Jar*, 1961) を取り上げる。この小説はプラスが大学生の時に自殺未遂をし、その後、精神病院に入院した時の経験をもとに書かれた作品である。主人公の名は、エスター・グリーンウッド (Esther Greenwood) で、学生時のプラスと同じく雑誌のゲスト編集員として夏休みにニューヨークにある出版社へと行く。大学では成績優秀者ではあったが、この合宿に参加した他の女子大学生の有能ぶりに、主人公エスターは劣等感を抱き始める。そしてついには、自分が「社会不適合者」であると思ひ込み、精神衰弱に陥ってしまうのである。

The trouble was, I had been inadequate all along, I simply hadn't thought about it.

The one thing I was good at was winning scholarships and prizes, and that era was coming to an end. (81)

ニューヨークでの研修から帰宅したエスターは、大量の睡眠薬を服用し、自殺を図る。幸い、家族によって見つけ出され、一命を取り留める。そしてそれからしばらく大学を休学し、精神病院に入院し、電気ショック療法を受けるのである。その場面は、第2章で触れたジョニー・パニックを主人公から取り出そうと医師が手術室へ連れていく場面によく似ている。

Finally, we stopped at a green door with ELECTRO-THEATRY printed on it in black letters. I held back, and Doctor Nolan waited. Then I said, 'Let's get it over with, and we went in.

[...]

Miss Huey began to talk in a low, soothing voice, smoothing the salve on my temples and fitting the small electric buttons on either side of my head. 'You'll be perfectly all right, you won't feel a thing, just bite down ...' And she set something on my tongue and in panic I bit down, and darkness wiped me out like chalk on a blackboard. (226)

この電気療法の後しばらくして、エステルは退院することになる。しかし、病気から回復し退院を迎える彼女はどことなく力なく不安げで、退院の審査の面接室にまるで操られるように入っていく。"The eyes and the faces all turned themselves towards me, and guiding myself by them, as by a magical thread, I stepped into the room." (257) はっきりとは書かれていないが、治療はおそらく成功したと言えるだろう。しかしなぜか、エステルからまるで魂が抜き取られてしまったような印象で最後は終わっている。何が彼女から抜き取られてしまったのか。それは、エステルが睡眠薬を多量に服用し自殺を図った時の言葉に隠されていると推察する。

Cobwebs touched my face with the softness of moths. Wrapping my black coat round me like my own sweet shadow, I unscrewed the bottle of pills and started taking them swiftly, between gulps of water, one by one by one.

[...]

The silence drew off, baring the pebbles and shells and all the tatty wreckage of my life. Then, at the rim of vision, it gathered itself, and in one sweeping tide, rushed me to sleep. (178)

「影」はエステルにとって大事なものとして描かれている。睡眠薬は、小石や貝殻や、すべての生命の残骸とともにエステルを潮の流れの中に押し流した。こういったものは、「ジョニー・パニックと夢の聖書」に登場する湖に沈むものたちと共通している。それらはつまり、人の過去であり、歴史である。「ジョニー・パニック」の湖の中にごめいていた「影」は、エステルが自殺するときと一緒に連れて行こうとした「影」と同じものだと言えるだろう。また、エステルは、ニューヨークでの研修から帰ってきてから、「影」について次のように述べている。

I thought the most beautiful thing in the world must be shadow, the million moving shapes and cul-de-sacs of shadow. There was shadow in bureau drawers and closets and suitcases, and shadow under houses and trees and stones, and shadow at the back of people's eyes and smiles, and shadow, miles and miles and miles of it, on the night side of the earth. (155)

影は、暗闇ではあるけれど、必ず実体にくっついて日の当たらないあらゆるものを請け負っている。たとえ世間的には価値がなく評価されないガラクタの寄せ集めであったとしても、そんな存在にエステルは気付き、目を留め、愛着や親近感を抱いているのである。エステルは、ニューヨークでの研修で、それまでの彼女の過去を全否定された気持ちになっていた。しかし、それらは彼女にとっては大切なもので、否定したり、消し去ることのできるものではなかった。

「ジョニー・パニックと夢の聖書」における主人公の見た夢の湖は、人々のささいな、時にガラクタとして忘れ去られた過去が寄せ集められる場所だった。それと同様に、『自殺志願』の主人公エステル・グリーンウッドにとっての「影」もそのような人間の歴史の中の光の当たらない部分を意味していた。両作品の主人公二人とも、おそらくシルヴィア・プラスの化身と呼べる存在で、彼女たちはそういった、世間では評価されない小さなものたちを愛

する女性たちなのだと言えよう。

4. 子供と夢

本章では、シルヴィア・プラスの子供向けの詩「おやすみ、おやすみ」(*The Bed Book*, 1976)における「夢」に焦点を当てたい。この詩は、もともと子供向けの詩として書かれたものであるが、出版社に採用されずにいたのを、プラスの死後、元夫で詩人のテッド・ヒューズ (Ted Hughes) によって、Quentin Blake の絵とともに絵本として出版された。プラスは童話を数編書いているが、絵本の作品はこれのみとなっている。

この詩には、子供たちが飛びつきそうな様々なベッドが登場する。

BEDs come in all sizes-
Single or double,
Cot-size or cradle,
King-size or trundle.

Most Beds are Beds
For sleeping or resting,
But the best Beds are much
More interesting!

魚釣りのできるベッド、猫でいっぱいベッド、サーカスの皆が跳ね回れるベッド、潜水艦のベッド、など。脚韻が施された弱強二歩格を用いたリズムカルな韻律で様々なベッドが登場していく。そして次のように締めくくられる。

Bird-Watching Beds.
Beds for zero weather-
Any kind of Bed
As long as it's rather
Special and queer
And full of surprises-
Beds of amazing
Shapes and sizes,

NOT just a white little

Tucked-in-tight little
Nighty-night little
Turn-out-the-light little
Bed!

最後の連で述べられているように、子供にとって眠ることは「おやすみなさい」(“Nighty-night”)と言って、電気を消すだけの退屈な行為なのであろう。多くの子供はおそらく、夜、なかなか眠らない。楽しい1日を終わらせたくないかのように、彼らはベッドの上で遊んだりするのだろう。また、眠ることを怖がる子供もいるだろう。しかし、これまでの章で述べてきたように、シルヴィア・プラスにとって、眠りとは、夢の世界とつながる場所である。日常で忘れられた小さなかけらたちが、不思議な繋がりを持って奇妙な物語を見せてくれる世界である。それは謂わば、現実世界の影である。そんな魅力的な世界への導入口として、文字通り夢のようなベッドを楽しげな言葉とリズムに乗せて提示する。そのことによって、プラスは子供たちを夢の世界へと誘っていると言える。つまり、夢を見ることの準備を、この詩を通して子供たちにさせたいとプラスは望んだのではないだろうか。

5. 詩と夢

本章では、1977年に出版された短編集『ジョニー・パニックと夢の聖書』の中から、プラスによる詩論「ある比較」(“A comparison”)を取り上げる。このエッセイは、“How I envy the novelist!” (62)という一文から始まり、小説家と詩人の違いを、比喩を用いて比較しながら説明している。プラスにとって小説家とは「時」を扱う人だという。

Her business is Time, the way it shoots forward, shunts back, blooms, decays and double-exposes itself. Her business is people in Time. And she, it seems to me, has all the time in the world. She can take a century if she likes, a generation, a whole summer. (62)

もともとプラスは小説家志望であった。それに、

『自殺志願』という長編小説の他に、短編もいくつか書いている。しかしどれもほとんど知られてはいない。やはりプラスは詩人として知られており、また当時の彼女も自分が何に向いているか自覚していたのであろう。小説家の描く「時間」は、詩人の描くそれよりも長く、描写も細かく自由自在に操ることができる。それとは対照的に詩が扱う「時間」は短く、表現方法も小説のそれとは異なる。ただ描写すると言っても何かの別のものを暗示していたり、リズムもある程度制限されている。詩はほんの一呼吸の間に起こる「時間」を取り扱っているとプラスはそこで述べている。

I can take about a minute.

I'm not talking about epic poems. We all know how long they can take. I'm talking about the smallish, unofficial garden-variety poem.[...]

So a poem takes place.

And there is really so little room! So little time! The poet becomes an expert packer of suitcases:

*The apparition of these face in the crowd;
Petals on a wet black bough.*

There it is: the beginning and the end in one breath. (62-63)

“apparition”とは「亡霊」や「幽霊」のことを指すが、この言葉を人間の「影」と捉えることもできるだろう。何気ない日常風景や、人々の表情に垣間見られる「影」の一部を捉えて言葉にする。それが詩人の役割だとプラスは言っているのであろう。我々が眠っている間に見る夢で、小説のように長いストーリーを持つものはあまりないのではないだろうか。ほとんどの夢が、短く、断片をつなぎ合わせたかのような脈絡のないもので、時に昔懐かしい知人が出てきたり、すっかり忘れていた記憶が蘇ってきたりするのではないだろうか。そんな不思議なひと時を、プラスは詩の中で扱いたいと言っている。

6. おわりに

これまで見てきたように、プラスにとって「影」というものは重要なものである。それは日常の影の部分である「夢」であり、社会の中で目立たない些細なものたちであり、人間の過去すべてを含む歴史を指している。「ジョニー・パニックと夢の聖書」では、主人公は精神科の棚に保管してある患者の夢の記録簿を読むことを欲して止まなかった。ジョニー・パニックという夢の創造者を恋人として慕っていた。それはつまり、ジョニー・パニックとつながることで夢の溜め池である湖から、詩の材料を得たいと望むプラスの願望の表れと言えるのではないだろうか。

「ジョニー・パニックと夢の聖書」では、精神科の患者たちの悪夢から、医師たちは彼らを救い出そうとする。しかし、「自殺志願」では、電気療法により、神経衰弱から回復したエスター・グリーンウッドはどこもなく頼りない不安げな女性として描かれている。これらのことが示唆しているのは、おそらく、夢の世界とつながることは、時に人間の精神を病む。しかし、その世界から完全に切り離されることは、人間から影を取り去るのと同じように、根源的なものを取り去ることである、人間を何か空虚な実体のない存在にしてしまう、ということプラスは言いたいのではないだろうか。そして、詩人という存在は、その「夢」の世界と現実世界の間を自由に行き来し、あるいは決して「自由に」ではないかもしれないが、そこから人間たちが忘れてしまったり、見落としてしまっている、奇妙で美しいかけらを拾ってきて、カバンに詰めて、ほんの一瞬そのカバンを人々の前で開いて見せる、そんなことを仕事にしている人々だと、プラスは作品に登場する「夢」や「影」を通して伝えようとしているのではないだろうか。

引用文献

- Plath, Sylvia. *The Bed Book*. London: Faber and Faber Ltd. 1976
- The Bell Jar*. London: Faber and Faber Ltd. 1963
- “A Comparison,” “Johnny Panic and the Bible of Dream,”
Jonny Panic and the Bible of Dream: Short Stories, Prose, and Diary Excerpts. New York: Harper Collins, 1977.

参考文献

- シルヴィア・プラス『ジョニー・パニックと夢の聖書』皆見昭・小塩トシ子訳、弓書房 1979。
- 『自殺志願』田中融二訳、角川書店、1974。
- 『おやすみ、おやすみ』長田弘訳、みすず書房 2000。

